

二〇〇九年一月、十五日および三十一日に「万王の王神様解放権戴冠式」が行われました。【写真参照】
真のお父様はその場で、次のように語っておられます。

「私たち夫婦が、畏れ多くも天から印を受け、神様の実体として立ち、万王の王戴冠式を執り行うこととなり、……縦的万王の王であられる神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父、母様の戴冠式」（『ファミリー』二〇〇九年三月号、5～7ページ）



「万王の王神様解放権戴冠式」
(2009年1月31日、韓国・天正宮博物館)

真のお父様が語っておられるように、「万王の王神様解放権戴冠式」とは「万有を統治する横的万王の王、真の父、母様の戴冠式」であつて、「縦的万王の王であられる神様の実体」として立つておられる真の父母様の「横的万王の王」の戴冠式でもあるのです。さらに、お父様は「私たち夫婦（お父様と真のお母様）」が「天から印を受け、神様の実体」として立ち、執り行うとも語っておられます。

ところが『統一教会の分裂』は、真のお父様が「神様だけが解放権戴冠式であり、……先生が中心ではない」と語られたみ言の一部分を自分たちに都合良く解釈し、「万王の王神様解放権戴冠式」は「創始者」の為のものではなく、誰の為の行事でもなく、「神様だけの解放権

戴冠式」と述べています。これは「神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父、母様」の宣布のみ言を歪めている「虚偽の主張」です。

(3) 真のお母様が「統一教会の重要な政策などを自分勝手にしている」という「虚偽」

『統一教会の分裂』は「二〇〇九年一月十五日の『神様解放権戴冠式』から九日後の二〇〇九年一月二十四日に創始者は、韓鶴子に底意のある話をした」（139ページ）として、真のお父様のみ言を次のように引用します。

「お母さんは、勝手にしようと思つていて、勝手に動いてみろというのです。お母さんはお母さんの行きたいままに行き、私は私の行きたいままに行くと言つたのです。私が朝、どれほど深刻だつたでしょうか。日が昇る前に日が消える真暗な世界、電灯の光が砂浜に映るような、ちょうどそういう気持ちで未明から発ちました。今日は大変革を成すだろうというのです。お母さんは勝手にしろというのです」（139～140ページ）

しかしこのみ言は、原典を忠実に訳せば以下のとおりとなります。

「お母様に（お金を）預けましたが、お母様がしっかりと握っており、お金を自分の思いどおりに使おうと思っているのです。思いどおりにしなさいというのです。『あなたはあなたが行きたいように行き、私は私が行きたいように行く』と言つたのです。私が朝、どれほど深刻だったでしょうか。日が昇る前に、日が沈んだ暗闇の世界、電灯の明かりが砂浜に映るような、ちょうどそういう心で早朝にたつたのです。今日は大変革をなすというのです。お母様、思いどおりにしなさいというのです」（マルスム選集607-11～12、翻訳は教理研究院、以下も同じ）

『統一教会の分裂』は、前記のみ言を自分たちの主張に都合良く書き換え、真のお母様が「統一教会の重要な政策などを自分勝手にしている……その内幕を知る創始者は知つていて、それは深刻だというのである」（140ページ）と述べますが、これは「虚偽の主張」です。原典に当たつてみると、真のお父様は「お母様に（お金を）預けましたが、お母様がしっかりと握つております。お金を自分の思いどおりに使おうと思っているのです。思いどおりにしなさいというのです」と語つておられるのであって、このみ言を「お母さんは、勝手にしようと思つているのです、勝手に動いてみろ」というのです」と訳すことはできません。これはみ言の改竄であり、「お金」に関する部分を意図的に削除し、改竄しています。

さらに、真のお父様は「私が朝、どれほど深刻だったでしょうか」と語つておられます。が、その「深刻だった」という意味についても、『統一教会の分裂』は真のお母様が「統一教会の重要な政策などを自

分勝手にしている」からであると述べています。これはみ言の文脈を無視し、「深刻な事実」の意味を意図的にすり替えた悪意のある主張です。
真のお父様は次のように語つておられます。

「万王の王が何をしましたか？（神様解放権戴冠式です）それは全体を話したもので。ここからひっくり返ります。皆さんは恐ろしいことが過ぎたことを知りません。先生は深刻なときなのです。ここに九番目で来て十の峰を越えたのです。十数を越えて十二数を越えて十三数です。あと三年とどれほど残ったの？ 三年三百何日？」（マルスム選集607-19、二〇〇九年一月二十四日）

このように、真のお父様は「先生は深刻なときなのです。ここに九番目で来て十の峰を越えた」と語つておられます。すなわち二〇〇九年一月二十四日の早朝訓読会は、一月十五日に挙行した「万王の王神様解放権戴冠式」から十日目の朝を迎えた日であり、「十の峰を越えた」ときだつたのです。そのため、お父様は「十数を越えて十二数を越えて十三数」を勝利しなければならない「深刻なとき」であると言われたのです。「万王の王神様解放権戴冠式」から「ひっくり返ります。皆さんは恐ろしいことが過ぎたことを知りません。先生は深刻」と言われ、二〇一三年一月十三日の天一国基元節まで「あと三年どれほど残ったの？」と尋ねておられるほどでした。

また、真のお父様は次のようにも語つておられます。

「深刻な場であるのに、皆さんたちは何ですか？ここ（ラスベガスの天和宮^{チヨウガクジン}）に来て暮らす生活もそうです。お母様ならばお母様を中心に『先生がこのようにしてくださればと思います』と言いますが、私はそこに従つていかないのです。今回、神様解放権、何ですか？（『戴冠式です』）この意義を知らなければ大変なことになるのです」（マルスム選集607-10）

このように、眞のお父様は、「万王の王神様解放権戴冠式」の意義を知らなければ「大変なことになる」と語つておられるように、このみ言を語つておられるのは、『攝理的に重要な峠』を越えて勝利しなければならないときだったのです。だからこそ、眞のお母様が旧正月を迎える天和宮での生活に対し、お父様に「このようにしてくだされば」とお願いされたとしても、お父は「そこには従つていかない」と語られたのです。お父様は「十数を越えて十二数を越えて十三数」を越えていく「深刻なとき」であつたため、お母様にお金を全て預けられて、「あなたはあなたが行きたいように行き、私は私が行きたいように行く」……お母様、思いどおりにしなさい」と全面的に許可を出しておられたのです。ところが、『統一教会の分裂』は改竄したみ言を用いて、眞のお母様が「統一教会の重要な政策などを自分勝手にしている」ので眞のお父様は「深刻だった」というように意味を正反対にねじ曲げ、『虚偽のストーリー』によつてお母様をおとしめようとしています。

（二）「韓鶴子が創始者の血統に対して問題を提起した」という虚偽の主張

『統一教会の分裂』では、一二〇〇九年二月二十八日の早朝訓読会で「創始者は、韓鶴子との葛藤を暗示する言及をした」（148ページ）と述べており、次のみ言を引用します。

「お母さんも三十八度線を越えなければならない。あなたはあなたが行くべき道があり、私は私なりに行く道があると言つて行つてみなさい。……『先生が墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたか』などと言つてゐる。……原理を解釈すらできない人々が、先生が純血か、何の血か、先生の血がどうだというのか、墮落前に血を汚したのか」（148ページ）

『統一教会の分裂』は前記のみ言を用いて、眞のお父様が「韓鶴子との葛藤を暗示」されたと述べ、それは「韓鶴子が創始者の血統に対して問題を提起した」（148ページ）からだと主張します。しかし、これもみ言の改竄による「虚偽の主張」です。マルスム選集608巻には、次のようにあります。

「原理を解釈すらできない人々が、先生が純血か、何の血か。私はそれを知つてゐるので、この場に来ないようにしようと思つました。そこに行かないようにしようと思つました、汚らわしいことを知つます。